

令和 8 年度
入学者選抜学力試験問題

後期日程

国 語

注 意

1. 解答は別冊の解答用紙の所定の解答欄に書くこと。
2. 解答用紙の表紙を含むすべてのページの※印欄に、受験番号・氏名を記入すること。

受験番号は、本学受験票の受験番号を記入すること。

※印欄以外の箇所には、受験番号・氏名を絶対に書かないこと。

3. 試験終了後、この問題冊子は持ち帰ること。
4. 総ページ数

問題冊子—11 ページ

(うち白紙—1 ページ)

I つぎの文章を読んで後の問に答えよ。

(吉田は肺を患っており、母の看護を受けている。)

ある日は吉田はまた鏡を持って来させてそれに枯れ枯れとした真冬の庭の風景を反射させては眺めたりした。そんな吉田にはいつも南天の赤い実が眼の覚めるような刺戟^{しげき}で眼についた。また鏡で反射させた風景へ望遠鏡を持って行って、望遠鏡の効果があつたかどうかということ、吉田はだいたいぶんがいて間寝床のなかで考えたりした。大丈夫だと吉田は思ったので、望遠鏡を持って来させて鏡を重ねて覗いて見るとやはり大丈夫だった。

ある日は庭の隅に接した村の大きな櫟^{くわ}の木へたくさん渡り鳥がやって来ている声がした。

「あれは一体何やろ」

吉田の母親はそれを見つけて硝子^{ガラス}障子のところへ出て行きながら、そんな独り言のような吉田に聞かすようなことを云うのだったが、痲癩^{かんじやく}を起すのに慣れ続けた吉田は、「勝手にしろ」というような気持でわざと黙り続けているのだった。しかし吉田がそう思つて黙つているというのは吉田にしてみればいい方で、若しこれが気持のよくなるときだったら自分のその沈黙が苦しなくなつて、(一体そんなことを聞くような聞かないようなことを云つて自分がそれを眺めることが出来ると思つているのか)と云うようなことから始まつて、母親が自分のそんな意志を否定すれば、(いくらそんなことを云つてもぼんやり自分がそう思つて云つたということに自分が気がつかないだけの話で、いつもそんなぼんやりしたことを云つたりしたりするから無理にでも自分が鏡と望遠鏡とを持ってそれを眺めなければならぬような義務を感じたりして苦しくなるのじゃないか)という風に母親を攻めたてて行くのだったが、吉田は自分の気持がそういう朝でさっぱりしているの、黙つてその声をきいていることが出来るのだった。すると母親は吉田がそんなことを考えているということには気がつかずにまたこんなことを云うのだった。

「なんやらヒヨヒヨした鳥やわ」

「そんなら鴨ひよですやろうかい」

吉田は母親がそれを鴨きに極めたがってそんな形容詞を使うのだということが大抵わかるような気がするのでそんな返事をしたのだったが、しばらくすると母親はまた吉田がそんなことを思っているとは気がつかずに、

「なんやら毛がムクムクしているわ」

吉田はもう痲癩Aを起すよりも母親の思っていることがいかにコツケイAになって来たので、

「そんなら椋鳥むぐですやろうかい」

と云つて独りで笑いたくなくなつて来るのだった。

そんなある日吉田は大阪でラジオ屋の店を開いている末の弟の見舞をうけた。

³ その弟のいる家というのはその何ヶ月か前まで吉田や吉田の母や弟やの一緒に住んでいた家であった。そしてそれはその五六年も前吉田の父がその学校へ行かない吉田の末の弟に何か手に合つた商売をさせるために、そして自分達もその息子を仕上げながら老後の生活をして行くために買った^②小間物店で、吉田の弟はその店の半分を自分の商売にする積りのラジオ屋に造り変え、小間物屋の方は吉田の母親が見ながらずつと暮して来たのであった。それは大阪の市が南へ南へ伸びて行くこうとして十何年前まではまだ草深い田舎であつた土地をどどん住宅や学校、病院などの地帯にしてしまい、その間へはまた多くはその地元の百姓であつた地主たちの建てた小さな長屋がたくさん出来て、野原の名残りが年毎にその影を消して行きつつあるという風の町なのであつた。吉田の弟の店のあるところはその間でも比較的早くから出来ていた通筋で両側はそんな町らしい、いろんなものを商う店が立ち並んでいた。

吉田は東京から病気が悪くなつてその家へ歸つて来たのが二年あまり前であつた。吉田の歸つて来た翌年吉田の父はその家で死んで、しばらくして吉田の弟も兵隊に行つていたのから歸つて来ていよいよ落着いて商売をやつて行くことになり嫁を貰つた。そしてそれを機会に一先ひとず吉田も吉田の母も弟も、それまで外で家を持つていた吉田の兄の家の世話になることになり、その兄がそれまで住んでいた町から少し離れた田舎に、病人を住ますに都合のいい離家はなれのあるいい家が見つかったのでそこへ引越

したのがまだ三ヶ月ほど前であつた。

吉田の弟は病室で母親を相手に暫らく当り触りのない自分の家の話などをしていたがやがて帰つて行つた。しばらくしてそれを送つて行つた母が部屋へ歸つて来て、また暫らくしてのあとで、母は突然、

「あの荒物屋の娘が死んだと」

と云つて吉田に話しかけた。

「ふむむ」

吉田はそう云つたなり弟がその話をこの部屋ではしないで送つて行つた母と母屋の方でしたということを考えていたが、やはり弟の眼にはこの自分がそんな話も出来ない病人に見えたかと思うと、「そうかなあ」という風にも考えて、

「何であれもそんな話を彼方の部屋でしたりするんですやろなあ」

という風なことを云つていたが、

「それやお前がびつくりすると思つてさ」

そう云いながら母は自分がそれを云つたことは別に意にカイしてないらしいので吉田は直ぐにも「それじゃあんたは？」と聞きかえしたくなるのだつたが、今はそんなことを云う気にもならず吉田はじつとその娘の死んだということを考えていた。

吉田は以前からその娘が肺が悪くて寝ているということは聞いて知つていた。その荒物屋というのは吉田の弟の家から辻を一つ越した二三軒先のくすんだ感じの店だつた。吉田はその店にそんな娘が坐つていたことはいくら云われても思い出せなかつたが、その家のお婆さんというのはいつとも近所へ出歩いてるのでよく見て知つていた。吉田はそのお婆さんからはいつも少し人の好過ぎるやや腹立たしい印象をうけていたのであるが、それはそのお婆さんがまたしても変な笑い顔をしながら近所のおかみさんたちとお喋りをしに出て行つては、弄りものにされている——そんな場面をたびたび見たからだつた。

そんな風ではじめ吉田にはその娘のことよりもお婆さんのことがその荒物屋についての知識をシめていたのであるが、だんだんその娘のことが自分のことにもかん関聯して注意されて来たのはだいたいぶんその娘のヨウダイも悪くなつて来てからであつた。近所

の人の話ではその荒物屋の親爺さんというのが非常に吝嗇で、その娘を医者にもかけてやらなければ薬も買つてやらぬということであった。そしてただその娘の母親であるさつきのお婆さんだけがその娘の世話をしている、娘は二階の一と間に寝たきり、その親爺さんも息子もそしてまた来て間のないその息子の嫁も誰もその病人には寄りつかないようにしていることを云つていた。そして吉田はあるときその娘が毎日食後に目高を五匹ずつ飲んでいるという話をきいたときは「どうしてまたそんなものを」という気持がしてにわかにならぬ娘を心にとめるようになったのだが、しかしそれは吉田にとってまだまだ遠い他人事の気持なのであった。

ところがその後しばらくしてその嫁が吉田の家へ掛取りに来たとき、家の者と話をしているのを吉田がこちらの部屋のなかで聞いていると、その目高を飲むようになってから病人が工合がいいと云つていふことや、親爺さんが十日に一度位それを野原の方へ取りに行くという話などをしてから最後に、

「うちの網は何時でも空いてますよつて、お家の病人さんにもちつと取つて来て飲ましてあげはつたらどうです」

というような話になって来たので吉田は一時に狼狽してしまつた。吉田は何よりも自分の病気がそんなにも大つびらに話されるほど人々に知られているのかと思うと今更のように驚ろかないではいられないのだつたが、しかし考えてみれば勿論それは無理のない話で、今更それに驚ろくというのはやはり自分が平常自分について虫のいい想像をしているんだということを吉田は思ひ知らなければならなかつたのだつた。だが吉田にとつてまだ生々しかつたのはその目高を自分にも飲ましたらと云われたことだつた。あとでそれを家の者が笑つて話したとき、吉田は家の者にもやはりそんな気があるのじゃないかと思つて、もうちよつとその魚を大きくしてやる必要があると云つて悪まれ口を叩いたのだつたが、吉田はそんなものを飲みながらだんだん死期に近づいてゆく娘のことを想像すると堪らないような憂鬱な気持になるのだつた。そしてその娘のことについてはそれきりで吉田はこちらの田舎の住居の方へ来てしまつたのだつたが、それからしばらくして吉田の母が弟の家へ行つて来たときの話に、吉田は突然その娘の母親が死んでしまつたことを聞いた。それはそのお婆さんがある日上り框から座敷の長火鉢の方へあがつて行きかけたまま脳溢血かなにかで死んでしまつたというので非常にあつけない話であつたが、吉田の母親はあのお婆さんに死なれては

あの娘も一遍に気を落してしまつた。だろつとそのことばかりを心配した。そしてそのお婆さんが平常あんなに見えていても、その娘を親爺さんには内証で市民病院へ連れて行つたり、また娘が寝たきりになつてからは窃に薬を貰いに行つてやつたりしたことがあるということ、あるときそのお婆さんが愚痴話に吉田の母親をつかまえて話したことがあると云つて、やはり母親は母親だということ、を云うのだった。吉田はその話には非常にしみじみとしたものを感じて平常のお婆さんに対する考えもすっかり變つてしまつたのであるが、吉田の母親はまた近所の人の話だと云つて、そのお婆さんの死んだあととは例の親爺さんがお婆さんに代つて娘の面倒をみてやつてゐること、それがどんな工合にいつてゐるのか知らないが、その親爺さんが近所へ来ての話に「死んだ婆さんは何一つ役に立たん婆さんやつたが、ようまああの二階のあがり下りを一日に三十何遍もやつたもんやと思つてそれだけは感心する」と云つていたということ、を吉田に話して聞けたのだった。

そしてそこまでが吉田が最近までに聞いていた娘の消息だつたのだが、吉田はそんなことをみな思い出しながら、その娘の死んで行つた淋しい氣持などを思い遣つてゐるうちに、不知不識の間にすっかり自分の氣持が便りない變な氣持になつてしまつてゐるのを感じた。吉田は自分が明るい病室のなかに、そこには自分の母親もいながら、何故か自分だけが深いところへ落ち込んでしまつて、そこへは出て行かれないような氣持になつてしまつた。

「やつぱり吃驚しました」

それからしばらく経つて吉田はやつと母親にそう云つたのであるが母親は、

「どうやらがな」

却つて吉田にそれをナツトクさすような口調でそう云つたなり、別に自分がそれを云つたことについては何も感じないらしく、またいろいろその娘の話をしなから最後に、

「あの娘はやつぱりあのお婆さんが生きていてやらんことには、——あのお婆さんが死んでからまだ二た月にもならんでなあ」と嘆じて見せるのだった。

（梶井基次郎「のんきな患者」による）

(注) ○掛取り——代金の集金。 ○上り框——家の上り口のはしに用いられる横木。

問一 傍線部 A、E のカタカナを漢字に改めよ。

問二 傍線部 ①、⑤ の漢字の読みをひらがなで記せ。

問三 傍線部 1 「吉田はまた鏡を持って来させて」とあるが、それは何のためか、吉田の状況に留意して答えよ。

問四 傍線部 2 「母親が自分のそんな意志を否定すれば」とあるが、誰のどんな意志か、説明せよ。

問五 傍線部 3 「その弟のいる家というのはその何ヶ月か前まで吉田や吉田の母や弟やの一緒に住んでいた家であった」とあるが、吉田は「その弟のいる家」にいつ住み始め、どのような経緯で現在の家に住むことになったのか、説明せよ。

問六 傍線部 4 「自分が平常自分について虫のいい想像をしている」とあるが、それはどういうことか、説明せよ。

問七 傍線部 5 「平常のお婆さんに対する考えもすっかり変ってしまった」とあるが、どう変わったのか、説明せよ。

問八 傍線部 6 について、「そこへは出て行かれないような気持」とは、どのような気持ちか、説明せよ。

問九 傍線部 7 について、ここから吉田の母のどのような思いが読み取れるか、説明せよ。

II つぎの文章は、「中務の宮の姫君」と「宮のすけ」の恋について語った物語の一節である。これについて後の問に答えよ。

中務の宮の姫君、末の御子にて劣り腹なりけるは、宮うせ給ひてのち、母君さへ亡くなりて、心細げなりけるを、御せうとの君達などあつかひ聞え給ひ、内に参らせ給へば、御匣殿とて、上もむつまじう召しつかはせ給ひけり。容貌かたちなんいとをかしげになまめい給へれば、心寄せ聞ゆる人々もありけるに、いつよりか、この宮のすけ語らひつきて、人知れず浅からぬ心ざしにて、^Aかたみに頼みかはしてあれど、いたう忍び給へば、さらに知る人もなく、御達なども口かためて、^B通ひ路もたまさかなるに、宵あかつき、わりなくまぎらはして出で入り給ひ、昼など、曹司ざうしに立ち寄ることもなく、いとなだらかに、おだしき行く末をのみ契りて、入り給ふこともなければ、^Aしげき人目にもかからぬなめり。「今宵は」と言ひやりて、いつしかといそがるるほど、宵より月の色もをかしきに、東宮、御遊びせさせ給はんとて召したり。¹いと心やましう、口惜しうおぼせど、のがれがたくて参り給ふに、かしこは不調ふちょうなりと思ひて、文つかはず。こまやかにて、

²「わりなしや月にも忍ぶ思ひとて晴るるを道のさはりとぞ見る

むなしくのみも」と聞え給ふ。女君は、「待ち遠とほなる日ひごろさへあるを」となま恨めしう思ひ乱れ給へるままに、

「晴れて見る月とかげきや我が袖は涙かさねてかきくもる夜を

月てふものは」とうち捨て書きたる、いとをかしげなり。すけの君は、さすがに心苦しければ、人より先にまかでて、いたく更けつれどおはしたり。日頃のおぼつかなさなどを、言こと少なにしめじめと聞え給ふが、心深げなるものから、女も、人よりはことなりと見給ふるには心恥づかしくて、思すさまに恨めしさなどもうち出で給はねど、^ウ涙も忍びあへ給はぬをぞ、男君もらうたにおぼえ給ふ。逢ふ人からの秋の夜を、まして更け果てておはしつれば、いとどあわたたしう、時申しの声も心をまどはずばかりにて、うち嘆きつつ起き出で給ふ。また見る人もなき折なれば、心やすくもるともにいざなひ出でて、妻戸押し開けつつ見渡し給ふ。長月も半ばの空に、有明の月いみじう晴れて、庭の露に砂も白みあひ、^ホ籬かきの菊の霜にまがへり。少し見やらるる方なる梢はなどもは、色あひもさだかならず、松にかかれる鶯うすのみしるきも、露をかけてうちしほれたる、言ひ知らず、ものあはれなる朝

ぼらけなり。出で行かん空もなく、やすらはれ給ふ。

『五葉』による)

(注) ○御匣殿——天皇に仕える身分の高い女房の名。

○宮のすけ——東宮(皇太子)に仕える役所の次官。東宮亮。「すけの君」とも。

○御達——女房。

○曹司——部屋。つぼね。

○おだしき——安心な。

○不調なり——都合が悪い、思い通りにならない。

○むなしくのみも——「逢えなくてむなしはばかりです」の意。

○月てふものは——「月というものは恨めしいものです」の意。

○逢ふ人からの秋の夜——逢う人しだいで長く感じられる秋の夜。

○時申しの声——時刻を知らせる声。

問一 傍線部ア、ウについて、簡潔に現代語訳せよ。

問二 二重傍線部A「かたみに頼みかはし」、B「通ひ路もたまさかなる」とは、ここではどのようなことか、簡潔に説明せよ。

問三 傍線部1「いと心やましう、口惜しうおぼせど、のがれがたくて参り給ふ」について、

(a) 「のがれがたくて参り給ふ」を、動作の主体と「参り」の指す内容を具体的に明らかにしつつ現代語訳せよ。

(b) 「いと心やましう、口惜しうおぼせ」とは、何に対するどのような思いか、述べよ。

問四 傍線部2の和歌について、

(a) 「月にも忍ぶ思ひとて晴るるを道のさはりとぞ見る」をわかりやすく解釈せよ。

(b) 「わりなしや」とは、「宮のすけ」のどのような思いをあらわしているか、(a)をふまえて簡潔に述べよ。

問五 傍線部3「人より先にまかでて、いたく更けつれどおはしたり」を現代語訳せよ。

問六 傍線部4「人よりはことなりと見給ふるには心恥づかしく」とは、姫君のどのような思いか、説明せよ。

問七 傍線部5「出で行かん空もなく、やすらはれ給ふ」とは、誰がどうすることか、説明せよ。

III

つぎの文章について後の間に答えよ。ただし、設問の関係で返り点・送りがなを省いた箇所がある。

桓公讀_ム書_ヲ於_レ堂_上。輪扁斲_{キル}輪_ヲ於_レ堂_下。枳_{おきて}椎_ヲ鑿_ヲ而_レ上_リ。問_{ヒテ}桓公_ニ曰_ク、「敢_テ問_フ公_ノ所_ハレ讀_ム為_ニ何_ノ言_ト邪_ト。」公_曰ク、「聖人之言也。」曰_ク、「聖人在乎。」公_曰ク、「已_レ死_{セリト}矣。」曰_ク、「然_{ラバ}則_チ君_ノ所_レ讀_ム者_ハ、古人之糟魄已夫。」桓公曰_ク、「寡人讀_{ムニ}書_ヲ、輪人安_レ得_レ議_乎。有_{ラバ}說_則可_{トスルモ}、無_レ說_則死_{セント}。」輪扁曰_ク、「臣_ヤ也_ニ、以_テ臣_ノ事_ヲ觀_ル之_ヲ。斲_{ルニ}輪_ヲ、徐_{じよナレバ}則_チ甘_{ニシテ}而_レ不_レ固_{カラ}、疾_{しつナレバ}則_チ苦_{ニシテ}而_レ不_レ入_ラ。不_レ徐_{ナラ}不_レ疾_{ハナラ}、得_テ之_ヲ於_レ手_ニ而_レ応_ジ於_レ心_ニ、口_ニ不_レ能_ハ言_フ。有_{ルモ}數_ノ存_{スル}於_レ其_ノ間_ニ。臣_ハ不_レ能_ハ以_テ喻_ス臣_ノ子_ニ、臣_ノ子_モ不_レ能_ハ受_{クル}之_ヲ於_レ臣_ニ。是以_{ヨリ}行_年七十_{ニシテ}而_レ老_{イテ}斲_ル輪_ヲ。古_ト之_ト人_ト與_ニ其_ノ不_レ可_レ傳_{カラフ}也_、死_{セリ}矣_{。然}則_チ君_ノ所_レ讀_ム者_ハ、古_ト人_ノ之_ト糟_ト魄_ト已_ト夫_ト。」

〔莊子〕による

(注) ○桓公——春秋時代の斉の君主。 ○輪扁——車大工の扁。扁は人名。 ○斲輪——木を削って車輪を作る。

○椎鑿——大工道具。ツチとノミ。 ○糟魄——残りかす。 ○説——正當な言い分。

○徐——ここでは削りかたがゆつくりであること。 ○疾——ここでは削りかたが速いこと。 ○數——コツ。

○行年——生きてきた年數。

問一 二重傍線部A、Cの文中での読みを、ひらがなのみを用いて示せ。

問二 傍線部1について、ひらがなのみで書き下せ。

問三 傍線部2「以臣之事觀之」とはどういうことか、「臣之事」が指すものを明らかにしつつ、説明せよ。

問四 傍線部3について、現代語訳せよ。

問五 傍線部4について、

(a) 現代語訳せよ。

(b) それはなぜか、説明せよ。

問六 傍線部5について、どのようなことを言ったものか、説明せよ。

出典

出題対象 学部等	科目	大問 番号	著者名	作品名	出版社名	掲載ページ	出版年度	改変 有無
文学部	国語	I	(フリガナ) カジイ モトジロウ	(フリガナ) ノンキナカンジャ	新潮文庫『檸檬』所収	pp.296-305	2024	有
			梶井 基次郎	のんきな患者				
文学部	国語	II	(フリガナ) アラキダ レイジョ	(フリガナ) ゴヨウ	荒木田麗女物語集成／桜楓社	pp.181-182	1982	無
			荒木田 麗女	五葉				
文学部	国語	III	(フリガナ) ソウシ	(フリガナ) ソウジ	台湾中華書局	卷五 pp.18-19	1965	有
			莊子	莊子(『老子 莊子』)				